



分割は活力を

第260地区ガバナー

(長野) 後藤 新三 (飯田)

“活力が分割を果たした”と言いたいところをここは“分割は活力を引き出した”と言いたい。10数年前に地区分割のうわさがちょっと出たが俎上にのらぬうちに消え、再び1985～86年に具体的なスケジュールで浮上してきた。

愛知県と長野県とではロータリーの力は愛知県側が強く、弱い長野側には尚早という言葉で逃げ切ろうとする空気が一部に存在していた。その理由は①独立してやっていけるかどうか、②愛知県への郷愁。であったが地区年次大会で賛否が問われ、もはや時代の要請ということで決行することになった。

そのときクラブ数は愛知60に対し長野は36、これを40にすることが分割へのR Iの条件であった。時のガバナーは長野県内をクラブ拡大の急務を説き回り、通常ではなし得ない5クラブもの新設を遂げ、1987年7月1日、地区分割のスタートが切られた。

その直前年度末はなんとクラブ数101、会員数6,800という世界一の巨大な地区となり、愛知県プラス長野県の面積もまた広大、ガバナーの公式訪問をはじめ地区管理などきめ細かい指導はとても望み得ない、つまり分割は当然なものという状態となった。

さて、本年7月1日を迎えるまでの2年間に長野県すなわち新生第260地区は、クラブ数は36が43に、会員数は2,000が2,400に、なんと20%の拡大増強を果たしたのである。これは数量的に劣り、ロータリー意識と活動が弱いとされてきた長野県が、眠れる獅子よろしく、事ここ

に及んでは何としても分割を成功させようという気運が盛り上がり、全会員が自分のこととして立ち上がったためである。

それにつれてロータリーへの取り組み方も、以前にはない前向きなものとなった。これはもともと潜在していた活力なるものが、マグマが地殻を破り地上に噴出するのと同じにわき起こったものと思われる。

マイカーを駆って県内を公式訪問し各RCの諸君と膝を交えて談合する中で、その眼が、質問が、事業の内容が、自意識が生き生きとしていることが強く感じられた。もはやどこのクラブも眠ってはいない、何かをやらうという意気込みの強いことを読みとることができた。

活力の乏しさを憂えているアビー会長に、一度この山の中のどのクラブにでも突然訪れて見て下さいと言いたいほどである。分割前に量の貧弱さ、体質の弱さを嘆き、分割後を心配していたことは今では杞憂となった。

まさに“分割”という起爆剤により活力の出現を見たのである。否、もともとあった潜在的なものが日の目を見たのである。それにしてもきっかけまたは動機づけがいかに重要であるかを痛感した。それが活力を呼び起こしたとするならば、手をこまねいて嘆いているだけでは問題の解決には至らないということも知った。

地区内、全会員がこの2年間、分割成就に燃やしたエネルギーと興奮すなわちせっかく灯された“活力”の灯を、いつまでも大切に灯し続けていかなければならないと思う。

(タクシー業)